

これが私のニューノーマル

第 16 期 OB 柳原 慎平

小野先生，OB・OG の皆様，大変ご無沙汰しております。流通業域の営業志望で某 IT 企業（業界では、『元請』と呼ばれる会社）に入社して，「流通領域の営業職」という配属希望に反して，「化学領域のシステム・エンジニア職」(以下 SE 職) として初年度配属された柳原です。某化学メーカー様の基幹システム（別名 ERP）の導入・開発プロジェクトにアサインされ，目下，プログラムのソースコードと設計書を参照して，バグの原因特定および改修を協力会社（別名一次請）に依頼する業務に従事する毎日です。日々，化学領域の SE 職としての業務経験を積む一方，システム製造自体に興味がありません。管理職に対して「システム製造には興味ないので，システム導入の企画・構想業務がやりたい。」などと主張しているものの，上長は（建前上），「営業志望するだけの十分な理由があるのに SE 職配属というのは初耳。」と理解を示す一方，「キミが志望する開発上の上流工程をやるには，システム製造業務を十分経験している必要があるね。」と諭されるので，向こう 10 年は，SE 職継続の見込みです。当社の SE 職には，ジョブ・ローテーション制がなく，多くの社員は初年度に配属された業界領域を担務して会社員生活を終えます。『配属ガチャ失敗』と言わざるを得ず，残念！

そんな私の『ニューノーマル』は，朝 8 時に顧客先プロジェクトルーム¹に出勤して，夜 9 時に帰宅する，月残業時間 40 時間以内の日々です。『原則テレワーク』の全社方針には反するものの，年間残業時間「720 時間以内」という壁に直面していないこと，『サビ残』がほぼゼロなことに鑑みると，会社員としては「ホワイト」な部類です。仕事終わりの付き合いでの飲み会や，上司・取引先との休日ゴルフ・接待業務などはほぼなく，休日出勤も（今は）無いのでホワイトな会社員生活を存分に満喫しています。とは言え，大学生の頃から『ウェットな』会社員生活を思い描いていたので，コロナ影響があったとは言え，現況は少し残念です。ゼミ生時代は何かしらの飲み会が毎週ありましたが，入社以来，飲み会は 2 か月に 1 回ペースで，先輩社員とも同期社員ともほぼ交流できていません。顔が分かる同期社員は数名な



同期社員とのアメフト観戦（著者は左端）

¹ 別名，SE 職へのタコ部屋。小野ゼミの活動で例えると，小野先生のご自宅に部屋を貸与いただき，その部屋で論文執筆活動をしているようなものです。

ので、なかなか仕事の苦労も共有できません。残念！

交流の少なさという面で言うと、小野ゼミにおいても同じです。小野ゼミの先輩・後輩が一堂に会する飲み会は1度もありませんでした。同期会も、卒業以来1回だけでした。²とは言え、16期との交流はちゃんと続いていて、木幡（第16期OB）が広島から東京に戻ってくる度に16期男子+エディさん（第16期OG）飲み会は都度開催されているし、はるか（第16期OG）とも数ヶ月に1度は食事をしています。各々忙しい中でも、近況報告やゼミ生時代の思い出話ができる仲間は、同期社員との交流の少なさも影響して、得難く貴重だと最近痛感しています。

18期生とももっと交流したいと思っていましたが、18期生のゼミ活動はオンライン中心だったようで、なかなか機会がありませんでした。聞くとところによると、18期生は小野先生と直接杯を交わしたことが無いそうです。つるの屋も、山食も、グル学も、ロー棟も、きっと18期生は未体験³なんですね。活動場所に捉われないのが、18期から始まっている『ニューノーマル』な小野ゼミなのかもしれません。集合できる活動場所を求めて、三田の街を彷徨った身としては隔世の感があるものの、小野ゼミが、コロナという時代の変わり目に直面してもなお、来年以降も、私のような大学生を受け入れ、大学生の成長を促す場として存在し続けるという価値が重要なのであり、細かい伝統を懐かしむようでは、今後は時代に取り残されていくのかもしれない。

以上、枯れ木も山の賑わい、と考えて取り留めもないことを書いてきました。「エッセイ書いてください。」とLINEを送ってきた、ゼミ長の

芝田さん（第18期）に満足いただける内容であることを祈りつつ、『Ctrl+S』キーを打鍵した後、docx ファイルの編集を終了します。



第16期男子 on 赤坂
(左から著者、北澤さん、木幡さん、岩間さん)



新大久保で同期とキメ顔 (左から著者、関口さん)

² 同期会の開催頻度は、コロナの影響が無くなれば現役生時代よりも増やしたいですね。

³ つるの屋が閉店したり、山食がクラウド・ファンディングで資金調達したりする状況は、小野ゼミだけでなく、慶應義塾の伝統自体の危機だと感じます。ただし、18期生も徹夜はしたようで、(良し悪しは別として、) 小野ゼミの伝統は受け継がれていると感じます。